

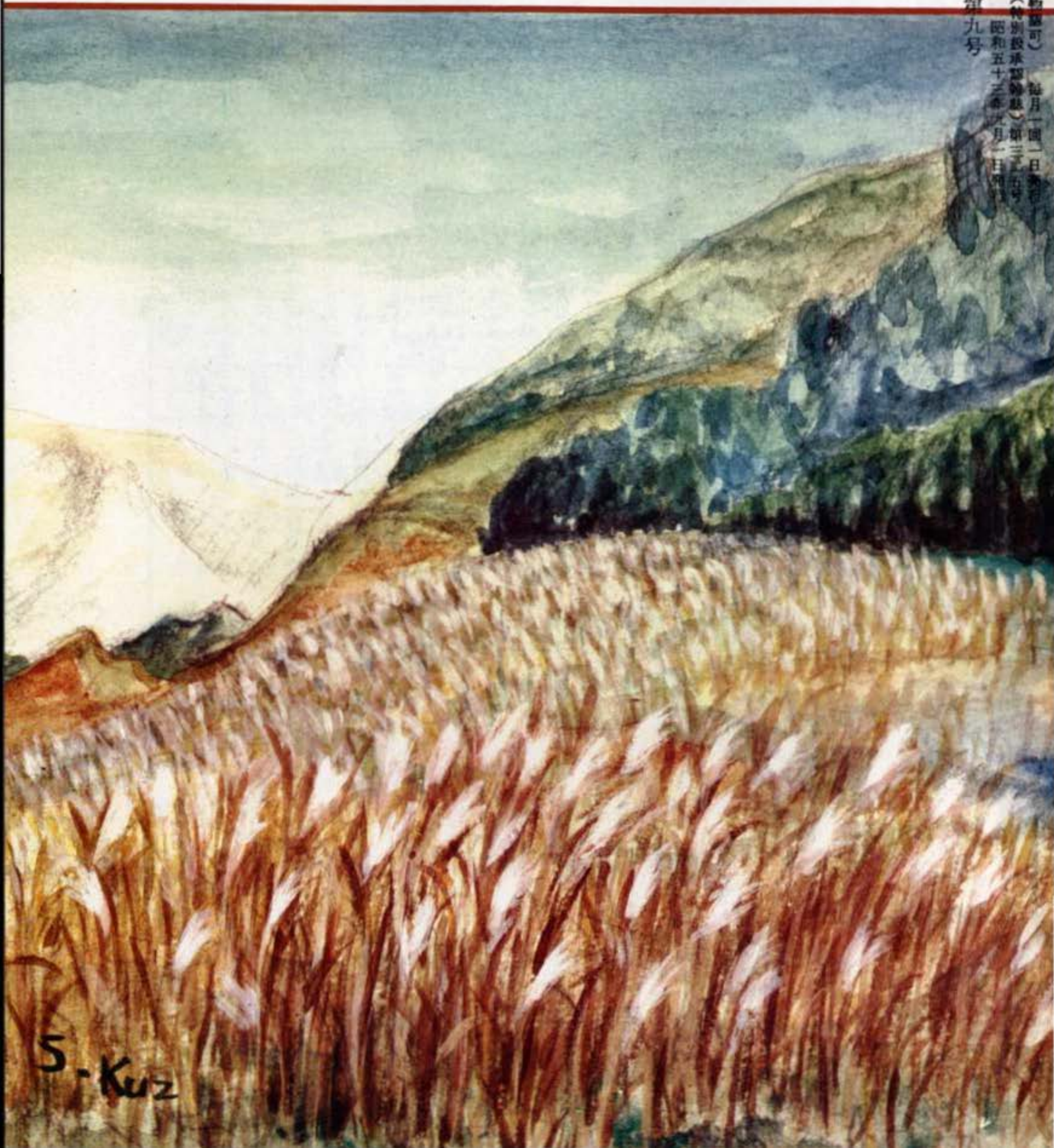
浄土

1978 - 9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別般承認郵便) 第三五五号
昭和五十三年八月二十五日印刷 昭和五十三年九月一日発行

第四十四卷

第九号



S. Kuz

九月によせて

彼岸のことについては、今月号に書かれる
と思いますので、此岸のことについてふれた
と思います。九月十五日は敬老の日ですが
私の住んでいる神奈川県は人口約六百六十六
万人ありますが、平均年令が三一・〇一歳と
全国的にみてもヤング県であります。それで
も老年人口は去年より二万人増えて、総人口



の五・七%を占める三十八万人となっていま
す。このように六十五歳以上の人が増加し、
人間の平均寿命が延びることは、環境衛生等
が進歩したことの証明で、先進国として大変
けっこうなことです。しかし養護老人ホーム
などに行きますと、なかには、この人等の、
生きがいは何であるかと考えてしまうような
老人をみうけます。人間にはつくづくライフ
ワークとか趣味が必要だなと思います。

先般、立教大学が来年の入学者より社会人
を募集すると発表しました。生涯教育がさけ
ばれている現在、大変タイミングのよい企画
であると思います。このような企画は大いに
他の大学でもやっていただきたいと思いま
す。ただなんとなく大学に來ている現在の若
者とちがって、勉強意欲があり、いったん社
会に出て、再び勉強しようという人もかなり
現在いると思います。これからの時代は生涯
教育であり、再教育ではなく、何歳になつて

も勉強するという姿勢が必要です。一度社会
に出た人が、一生のうち再び四年間位、大学
で勉強するという、よゆうが出来たら何んと
すばらしいことでしょう。最初はある一部の
人等のためかと思われませんが、だんだんに停
年後に自分が再び大学に入る時は、こんな勉
強をしてみたいと思つていた夢がかなえられ
るようになります。ただ社会人のためには出
来たら、一年程度で勉強したいことをさして
くれる大学がアメリカのように出来ると、も
っと便利になります。生きがいとは何かと考
えると、これは大変むずかしい問題です。よ
く老人ホームなどでは、テレビの好きな番組
をみることや、好きな食物を食べることなど
と答えが返つて來ます。生きがいは人間一人
一人皆ちがいます。それは充実した毎日を過
ごすことだと思ひます。それには努力が必要
です。永年かかつてつちかわれたものが生き
がいとして出て來ます。こうして、ことが成
就する、これが到彼岸であります。

九月号



阿弥陀ほとけの本願は、末
代のわれがためにおこし給
へる願なれば、利益いまの
時に決定往生すべき也

——『念仏往生要義抄』

目次

法話

涅槃常楽の彼岸……………藤井亮彦……(2)

聞法……………武内紹晃……(5)

＜ふるさと紀行＞上州富岡と製糸……………神宮有寛……(22)

自然を考える⑥＜歴史と自然＞

自然と歴史ということ……………田村圓澄……(10)

信仰の人・高田屋嘉兵衛……………須藤隆仙……(14)

モンゴル仏教を訪ねて……………松井勝重……(27)

江戸後期の宗門歌人

良洗上人の研究(一)……………吉田光覚……(32)

浄土句集……………一田牛畝選……(9)

＜表紙裏・巻頭言＞ 九月によせて……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



涅槃常樂の彼岸

藤井亮彦

(茨城教区教区長
古河市正定寺住職)

Aさんの妻は七十二歳で亡くなった。Aさんの歌に、

幽明をわかつてど生涯共に見し

中秋の月は永久に輝く

死ぬ前に妻が作りしクッションに

寄りかかり居れば安らぎを得る

帰らざる過去を偲びて懐しみ

法名を称え遺影見つむる

思い出は数限りなく胸を焼く

只成仏を祈る日日なり

Aさんの妻は慈悲の人であった。集金人や行商人に座布団を出し、茶菓を出す。乞食が来てもお茶を出した。

Aさんは妻に、布施狂だと悪口を言ったが、一向に気にしなかったのである。

Bさんの家では頭の良い、大学三年の長男が白血病で死んでしまった。両親はじめ家中一同の落胆は大変なものであった。Bさんは自分の事を、無信仰で変り者だと言う。夢にも思わなかった長男の難病に必死の看病も空しく長男に死なれ、ほんとうに、まいりましたと言った。長男が入院して一カ月の間、Bさんは懸命に尽くした。親なればこそその事である。それこそ無信仰どころか、観音様のような慈悲の人になっていたのである。Bさんは花を持って七日七日の忌日に墓参する。まっ暗な悲しみの愛別離苦と惨酷さの中から発見した尊い光明、Bさんは阿弥陀様のいますことに気付いたのである。

Cさんは町内会長を永らくやっている温和な、責任感の強い人である。寺の用事も良くやってくれる得難い人である。Cさんが常に言うことは、馬鹿だからやれるんだと言う。そして、あははと大声で笑う、正に奉仕の人である。

Dさんは若い者と別居で、針仕事や少々の畑仕事を気なりにやっている老婆である。寝たきりの義弟を看病しながら静かに暮らしている。病人が居るので旅行は出来ない。病人が心配で出られないのである。茄子が出来たとか、胡瓜が取れたとか言っては五つ六つ持って来る。こういうことは出来そうで出来ない事である。和尚さんは、いつも丈夫ですねとDさんが言う。私は阿弥陀様と二人で居るんだよと答える。この会話は時々交わされるのである。

寺に證誠山と大書した山号の額がある。これは山岡鉄舟の立派な書である。『山岡鉄舟』と題する南条範夫の著書に依ると、鉄舟の交際範囲は大臣から乞食に至るまで、あらゆる階層に亘っている。すべての人に愛されていたのである。明治二十一年七月十九日死亡、行年五十三歳、坐禅のままの大往生、死因は胃癌であった。辞世

の句に「腹張りて苦しき中に明けがらす」がある。

功名を欲せず、剣、禅、書の道を求めつづけた傑物で、その書に対する揮毫は人間業とは思われぬほど早く、数に於ては信じられぬほど多いのである。明治二十一年、死亡の年の三月から七月までの間に扇子四万本を揮毫している。揮毫の謝礼金はすべて社会事業、災害救助、寺院復興などに費されたのである。夥しい揮毫と並行して大蔵經の書写もつづけた。増上寺の高麗版大蔵經を借用し、主として夜間写經をつづけ、死の前日までに『大般若經』一二六卷を写したのである。

鉄舟は每晚一升酒を呑んだと言う。十八歳の頃のエピソードに次のような事があった。ゆで玉子と言うやつは小っぱけなものだが、どうしても一度に二十個以上は食べぬものだと言ったので、鉄舟が、あんなも五十や百は何でもないと言地を張り通して、とうとうゆで玉子を百個平らげてしまった。しかし猛烈な吐き下しで、三日間は死ぬほど苦しんだと言うことである。或時は健脚自慢の先輩が、下駄ばきで成田山に御詣りしてくる。日帰りだ。誰か一緒に来ないかと言う。往復三十六里（一四一キロ）だ。誰も返事をしない。鉄舟が行きましょ

うと答えた。翌日は大暴風、先輩は行かないので、鉄舟は一人で早朝からその夜十一時過ぎ、ずぶ濡れの婆で、先輩に、今帰ってきましたと言った。足駄の齒は半ば以上すり減っていた。

鉄舟の額のある本堂で秋彼岸を迎える

秋彼岸雨の御堂のこぼれ銭

綾華

九月二十日は彼岸入、二十三日は秋分の日、二十六日は彼岸明である。彼岸花が境内のまわりに咲いている。自然に咲いている真赤な彼岸花を取ってお墓に上げる人がある。これは毒草で、死人花、幽霊花とか言っている。ので、お墓に上げるには感心しない毒々しい花である。

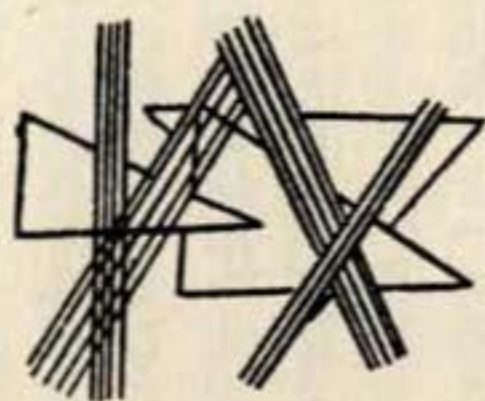
彼岸は波羅蜜の訳で、正しくは到彼岸と称し生死輪廻の此岸を離れて涅槃常樂の彼岸に到達する意味である。

春分、秋分の二季に於て仏事を啓建することを彼岸会と言う。これは『観無量寿経』日想観の説に基くものであり、善導大師の『観経定善義』の日想観には、春秋の二際のその日正真より出でて西に日の没する処は阿弥陀の仏国に当り、まさに西方十万億刹を超過すと言う。これ

を觀じて阿弥陀仏国の所在と知り、以て欣慕の心を起こすべきことを説いたものである。日は西方阿弥陀の八葉の蓮台に傾くので西方浄土を彼岸と名づけたのである。到彼岸の波羅蜜に六種、十種、四種の別がある。六種とは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧である。

今年の夏は特に酷暑が続いた。気温も三十五度から四十度に近い耐え難き日々であった。お盆だ、お施餓鬼だ、布教だと、種々の行事を済ましてやっと涼しい九月となり、ほっとした気持ちで迎える中秋。そして秋彼岸である。名月のこの時、秋草は咲れ乱れ、虫は啼き月は清く実に快適な頃である。〃月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人の心にぞすむ〃と法然上人は詠んでいる。有難いお歌である。秋彼岸、御先祖様に感謝し、称名一行の心を深める良い折である。

高祖善導大師千三百年御遠忌が昭和五十五年、元祖法然上人降誕法然上人降誕八百五十年慶讃が昭和五十七年である。総本山知恩院、大本山増上寺はじめ各大本山と末寺と檀信徒はこの遠忌と慶讃の事業に向って、一丸となって突進している。まさに到彼岸の時である。この好機に恵まれ働かして戴くことは実に有難いことである。



聞 法

武内紹晃

(竜谷大学教授)

(一) 「仏説」

仏教ではインド、中国、日本のいずれの宗派も、どの学派も仏道は「法を聞く」ことから始まることを教えている。このことは經典がすべて「如是我聞」ではじまっていることがよく示している。

經典はすべて「仏説」であって、「如是我聞」ではじまり、「歡喜奉行」で終るという形式で、仏陀釈尊の直

接の説法を記述したものとして伝えられている。したがって經典には大藏經中の他の「論」や「釈」のように作者の名の記されているものは一經もない。多くの經典に「仏告阿難」という語が出るように、その伝聞者は釈尊の常隨の弟子阿難であるとされて来た。

ところが近代の仏教学において、歴史学的研究の成果として、いくつかの經典の成立の年代が明らかにされるようになった。その結果、經典は従来中国や日本で教えられて来たような歴史的仏陀である釈尊の説法の記録で

はなく、また仏伝も釈尊の生涯や、思想の事実をそのままに伝えたものではなく、むしろインドにおける仏教の歴史的な事実を述べるものと考えるべきであることが明らかにされた。經典の古いものでも釈尊の入滅後一〇〇年以上も経って出来たもので、所謂大乘の經典はそれからさらにさらにおくれた時機に出来たものであることが明らかになった。しかも何れの經典も当時の仏教全体に統一的なものでなく、ある部派、ある学派に伝承され、奉持されて来たものであるといわれる。

さてそれでは「仏説」とはどういうことなのか。仏陀釈尊の説法ではなく、滅後何百年も経て出来上ったものであれば、これは「仏説」とは言えないはずである。大乘の經典が仏説であることの理由について、五世紀頃世親は『大乘莊嚴經論』という論書の釈のなかで次のような意味のことを述べている。

「大乘の經典によって悟入し、それによって自らの煩惱を調伏し、法性に逆わない。法性は大菩提に至るためである。したがって大乘の經典は仏説である」

また世親の兄無著の主著である『撰大乘論』には、

「最勝菩提の因であるから、大乘は真の仏説である」

とも言っている。これらの論書の言うところによれば、仏説とは菩提に達する因であるから、つまり成仏道であるから、成仏の教であるから仏説であると言うことになる。つまり「仏説」の仏陀は釈尊だけではなく、成仏せられた、菩提を得られた仏陀である。彼等にとって經典が仏説であることの意味はいつでもどこでも時代を超え、場所を選ばず、悟りへの道をとかれる仏陀の教である。

インドの五世紀頃までの仏教の論師方の推論の形式においては現量（直観）や比量（推論）よりは聖教に述べられていること（聖教量）をより確実な論拠としたことが、彼等の經典に対する姿勢をよく示している。彼等にとって經典は歴史的仏陀釈尊の説法をいうだけではなく、成仏せられた仏陀の時代や場所を超えた、今現在における語りかけであつたのであろう。

このことは經典のはじめの如是我聞の意味を考へるこ

とによつてもうかがうことが出来る。

(二) 「如是我聞」

經典は昔から第一結集等で示されるように数多くの長老比丘によつて結集（合誦）せられたものであるという。また多くの經典に述べられる仏陀説法の会座では数多くの比丘等に圍繞せられて説法されたと述べられている。このことは応病与薬といわれ、「一器の水を一器にうつすが如く」と言われる仏教伝道の原則とどうかかわるのであるか。また何故に經典の如是我聞の「我」は単数になるのであろうか。先ず結集は第一結集では五百人の阿羅漢が集つて、全員で一語一語を仏陀の教であることを確認して、それを文字にしたと伝えられている。また經典の会座では百千無量の衆に圍繞せられたと述べられている。これらのことから言うならば、如是我聞は当然単数でなく複数なるべきである。

『維摩經』という經典に大要次のような意味の文がある。

「この集會に集まつたすべての者は、仏陀が自分のす

ぐ前におられるが如く思う。世尊が一語を語られたにすぎないのに、集つた人々はおのおのが、その語が自分のためのものとして理解する」

この言葉のなかに、「我」と単数であることの理由を見出すことが出来る。つまり仏陀は千万の比丘衆に圍繞せられて説法しておいでになるが、説法を聞いておるものの側から言うならば、仏陀の前にいるものも、横やうしろから聞いているものも、みんなが自分ひとりだけが仏陀と向ひ合つて聞いている、仏陀は自分ひとりのために説法して下さっていると受け取られたことを示している。

このように仏弟子も、經典結集者も、また後のインドの論師方も皆、經典を今現在自分の前にまします仏陀の私独りのための説法として經典を頂いたことをうかがうことが出来るのである。このことが私達に聞法の心がけを教える。

(三) 聞 法

天台大師は『法華文句』のなかに、世間の四難事をあ

げ、値仏難、説法難、信受難と共に聞法難をあげている。

考えて見れば聞法にかぎらず、常にわれわれの日常生活において「聞く」ということが、本当にむづかしいことであるをつくづく感ぜざるを得ない。私自身僧侶として、また教師として、自坊で檀信徒の人達に話をして、また大学で学生諸君と語り合うとき、いつも自分だけが別の立場に立ち、自分だけが正しいという錯覚のなかで、常に相手を自分のペースのなかに引き込んで説得しようとしたり、相手の話を批判的にしか聞かない。少し以前に対話という言葉がはやったときがある。対話は勿論話し合うことであるが、本当の話し合いはまず相手の話を素直に聞かねばならない。このような当然のことさえもわれわれは日常生活において忘れてはいないだろうか。

『大智度論』には「聞いて信受奉行しないのは不聴である」と言う。信受奉行とは「教えを素直にうけて生活のなかに生かし、身体で行なっていくこと」と言う意味で經典の終りによく出る言葉である。つまり聞いても信

受奉行しなければ聞いたことにならないと言うのである。ところが私共の聞き方は先ず何にしても、本当に素直に聞くことが出来ない。仏教の話を聞いても、それを主体で受けとめるのではなく、何か批判的な態度になったり、自分の話の糧を求めている。仏教の書物を読むときも同様である。また經典を読んでも、常に对象的思维の場というか、何か整理される対象として受けとって、先程述べて来た仏弟子や、インドの論師方が自分独りのための今現在の仏陀の説法と受けとめ、虚心に仏説に耳をかたむけたのとは全く異なっている。

こう考えて来ると、天台大師が世間四難事の一つとして聞法難をあげられた理由がわかるような気がする。經典のなかに「心が素直で柔和な人は仏を見ることが出来る」といわれる。われわれは經典を通して教えられる聞法の態度を思い起して、浅薄な学解にこだわらず、經典のなかに仏陀の私に対する語りかけを聞かせて頂かねばならない。

浄土句集

一田牛畝選

福岡 原 敬二郎

梅雨漏りのして弘法のゆかり寺

東京 阪入 等達

湯上りの膝立て坐る扇風機

山形 松田 光誉

墓さらいといふ方言や盆まぢか

山形 松田 允子

大伽藍こもりて聞ゆ蟬しぐれ

東京 鳥居 千代

野に立てば夜風の匂ふ麦の秋

東京 星野 小登

風に乗り山梔子のまた匂ひ来る

群馬 鳥津 か寿

寺静かかすかに揺るる土用の芽

庭先は東山なる月の宿 一田 牛畝

噴井水汲み点つ新茶み仏に

東京 猪瀬 幸子

咲き継ぎて睡蓮の池にぎやかに

評 お茶は水がよければ美味しい。噴井水となれば、嚙ぞ新茶の味も殊更で、供えられたみ仏の喜び如何ばかりならん。

花菖蒲紫開く刻を見る

東京 真野よし子

評 お茶は水がよければ美味しい。噴井水となれば、嚙ぞ新茶の味も殊更で、供えられたみ仏の喜び如何ばかりならん。

花つきし程にはならぬ袖なりし

東京 鈴木 葉子

長安の山粧ふて君を待つ

福岡 増谷 雄鳳

町中を盆綱ひきの子等氣勢い

福岡 高良 慈風

評 十月に日中友好の浄土宗代表として善導大師の長安の都などを訪中する私への祝句と思う。秋ともなれば、中国の山々も粧うていることならん

東京 栗原やえ子

梅雨晴間墓をみがきて忌を修す

東京 田中 秀代

神奈川 松本せつよ

菖蒲田に又一としきり狐雨

古地図にて我寺探す日永かな

福岡 荒牧 還愚

若竹のなびく塀越し声交す

東京 阪入志津枝

自然を考える

(六)

——歴史と自然——

自然と歴史ということ



田村圓澄

(九州大学教授・文博)

一

朝になって目を覚まし、まず窓の傍に近付いて空を見上げる。これが最近の日課である。雲ひとつない真青な空を見上げて、がっかりする。今日も雨は望めそうにない。

福岡市の水道が時間給水になったのは、たしか今年の五日二十日のことであった。もう二カ月以上も時間給水がつづいているのみならず、制限はいっそう厳しくなっている。野

も山もすっかり乾き切っているが、雨の見通しはたたない。

例年、梅雨の季節ともなれば、雨が降りつづき、身体もじめじめしたものだ。押入れのなかにも青黴がつく。明るい青空を待ち望んだが、いつも梅雨明けまでの期間は長かった。しかし今年は梅雨らしくなかった。ほとんど雨は降らず、降っても少量であった。九州北部の市町村は、おしなべて水不足の危機に直面している。

二

こういう話を聞いたことがある。ゴルフ場が造成されると、決まって周辺の家の井戸水が枯渇するというのである。

丘陵部の樹木が繁茂し、木の葉の堆積によって雨水が保存されている限り、地下水は枯れることがなかったが、ゴルフ場ができて樹木は伐採され、保水はきかない。

見た目ではわからず、話を聞いて、地下水の動きの微妙さが理解できたが、ゴルフ場造成による井戸水枯渇は、天災ではなく人災である。では、このたびの九州北部の水飢饉は、全くの天災であるかという、そうであるとはいえないように思う。水道は井戸と異なり、すべて人工で規制されている。水源地のダムも、人間の頭脳と技術のつくるところである。都市の人口の増加と、使用水量との関係から、ダムの必要な容量が決定される。ダムの許容量をこえてまで、人口の膨脹を放

任するのは、自殺行為とさえいえるであろう。

開発につぐ開発、造成につぐ造成という、いわば場あたりの都市づくり、町づくりが、今日の水飢饉の要因のひとつと思われる。

寺院は、飲料水の豊富なところを選び、そこに営まれてきた。高野山に金剛峯寺を開いた空海も、水には注意深い人であった。僧尼や在家の仏教信者が多く集まる寺院においては、飲料水に対する配慮は切実であった。韓国の寺院を訪ねて気付くのは、水に事かかぬ場所に建てられていることである。

都市計画にたずさわる人や、ビルを設計する人びとは、慎重な水対策をたてているのであろうか。しかし今夏の事態は、それらの対策が空転していたことを示しているようである。

自然を軽くみていたのではないか、というより、人間の力を過信する傾向が、一部にあったのではないか。

三

昭和三十年代の初めの頃であつたと思う。

久しぶりに東京に行ったが、列車が都心に近づくとつれ、窓から見える高層ビルの素晴らしさにいたく感激した。戦災により、見る影もないほどに壊滅した筈の東京が、戦前を凌ぐ見事な姿で出現している。私の感激は、人間の文化や技術に対する自信の回復の悦びにながっていた。

東京を先頭として、日本全国の都市が好景気の波に乗って発展していった。戦後の日本の産業や経済の成長は、日本の歴史のなかにおいても画期的なことであつたと思う。しかし同時に、日本はかつて経験しなかった規模において、自然を損い、史跡を破壊した。

一本の木を切り倒すのに、かりに十分間かかるでしょう。しかしその木が、その程度にまで生長するのに、三百年、五百年もかかるのである。

樹木が繁茂しているところには、小鳥が集まる。林のなかで聞く小鳥の声は、なんとわれわれを慰め、また楽しませてくれることか。

ひと昔まえのことである。カリフォルニア大学のあるバークレーにきて間がなく、道を尋ねることすら容易でないように思われたが、ある日、思い切ってサンフランシスコのゴールデン・ゲート公園に行った。広い園内を歩いている内に、森のなかに入った。人影はなく、小鳥の囀りが聞えてくる。ベンチに腰をおろすと、目の前の芝生の上を、数匹の栗鼠がじゃれあっている。高い樹の枝を走ったりしており、お伽噺の国にでもきているような気になり、遠い異国にきた緊張感は吹きとんでしまった。

サンフランシスコの賑やかな街頭を歩いていたとしても、私の緊張と孤独は、容易に解消しなかったのではあるまいか。それにしても自然は、救済者でさえもある。その後、私

はしばしばゴールデン・ゲート公園を訪れたが、とにかく初めてここに来て以来、アメリカに親近感をいだくようになったのは事実であつた。

四

日本では、公園といえは樹木のあるのが普通である。しかしロンドンのハイド・パークなどと較べて著しく異なるのは、緑蔭をなすような樹木が少なく、また緑蔭をつくり出すように植えられていないことである。つまり森の公園は、私が住んでいる福岡県にも少ないようである。

日本の夏の太陽は烈しく照りつける。公園に行ってみても、休むべき木蔭がない。ハイド・パークでは、マロニエやプラタナスの巨木がつくり出す木蔭の下で、人びとは遊戯に興じ、読書を楽しんでいる。夏のハイド・パークは市民の生活の場であつた。

秋になると、黄色になった無数の葉が芝生

を覆い、あと片付けはたいへんな仕事である。これを免れるには、常緑樹を植えるのが賢明な策であるといえようが、しかし常緑樹の木蔭は大したことはない。ロンドンには規模の大きい公園がいくつもあるが、これらの公園の設計者は、自然との融合に価値を認め、それによって人間の生活が豊かさを増す、という思想の信奉者であつたのであろう。

五

北九州市の若戸大橋が完成したとき、新聞は一ページのカラー版で竣功を祝った。全国各地からの観光客もあとをたたなかつた。関門橋が開通したときも観光客が殺到したが、しかしいずれも一時的な現象であつた。

大分県の国東は六郷満山の古里である。阿弥陀堂建築で有名な富貴寺をはじめ、古い寺や石仏・石塔などがひろがり、仏教土着の歴史を語っている。交通は不便であるにもかかわらず、ここを訪れる人の数は増す一方で

ある。国東の自然と歴史が、人びとを引きつけるのであろうか。

自然を尋ね、史跡をめぐるのは、日本人だけではない。それは人間の根源に帰ることであり、限らない郷愁につながるものをもっている。しかし高度成長のこの二十年間に、消滅した自然、変貌した史跡は少くない。たとえば大宰府の水城は、天智二年（六六三）の白村江の敗戦の直後に築造され、『日本書紀』の記載とも合致する貴重な遺跡であるが、九州高速道路の架橋により、景観は一変した。

信仰の人・高田屋嘉兵衛

日中平和友好条約が締結されて、日本は国

『青春の門』に登場する香春岳は、新羅に縁り深い神体山であったが、セメント会社の石灰採掘のため、一の岳は見るも無惨な姿となっている。私は同時代の日本人に、何かが欠如しているように思えてならない。

自然や史跡に対する無暴な破壊は、われわれの人間性の軽視・無視に結びつきやすい。そして自然と歴史の尊重は、自分や他人、また外国の人をもふくむ人間の尊重に通ずる。——破壊された自然や史跡は、このことをわれわれに語りかけているようである。



須藤 隆仙

（函館市文化財調査委員）
（函館市称名寺住職）

際問題の上に新しい局面を迎えました。日本



— 嘉兵衛百三十回忌（昭和31年）に称名寺境内に建立された顕彰碑 —

としてはどこの国とも仲良くしてやっていくことが一番いいわけで、喜ばしいことであります。ただマスコミが種々いっておりますように、ソ連との関係をいろいろ考慮しなければなりません。地図を見ると解るとおり、日本は韓国・朝鮮そして中国とも隣り同志であります。同事にソ連ともまた隣り同志なのであります。しかもソ連とはいわゆる北方領土問題が解決しておりませんので、非常に複雑な関係にあるわけであります。

今ここに紹介する高田屋嘉兵衛という人は、北洋開発の豪商として知られる人ですが、同時に往昔の日露間の民間外交者として知られている人でもあります。しかもこの人は大変な仏教信者でありました。その事について少し記してみたいと思います。

試みに『広辞苑』を引いてみると、嘉兵衛翁について次のように記るされております。

「幕末の回船業者・北地開発者。淡路の人。一水夫から身を起して酒田・松前の航路を開

き、後、幕府の御用船頭。しばしば択捉・国後に渡って漁場を開き、文化九年、露艦に捕えられてカムチャツカに到り、ロシア語を学んで、日露間の折衝に当った。文政十年歿。

(一七六九—一八二七)

また以前に、文部省検定唱歌というものがありました。それに石原和三郎という人の作詞で高田屋嘉兵衛の歌がありました。次のとおりです。

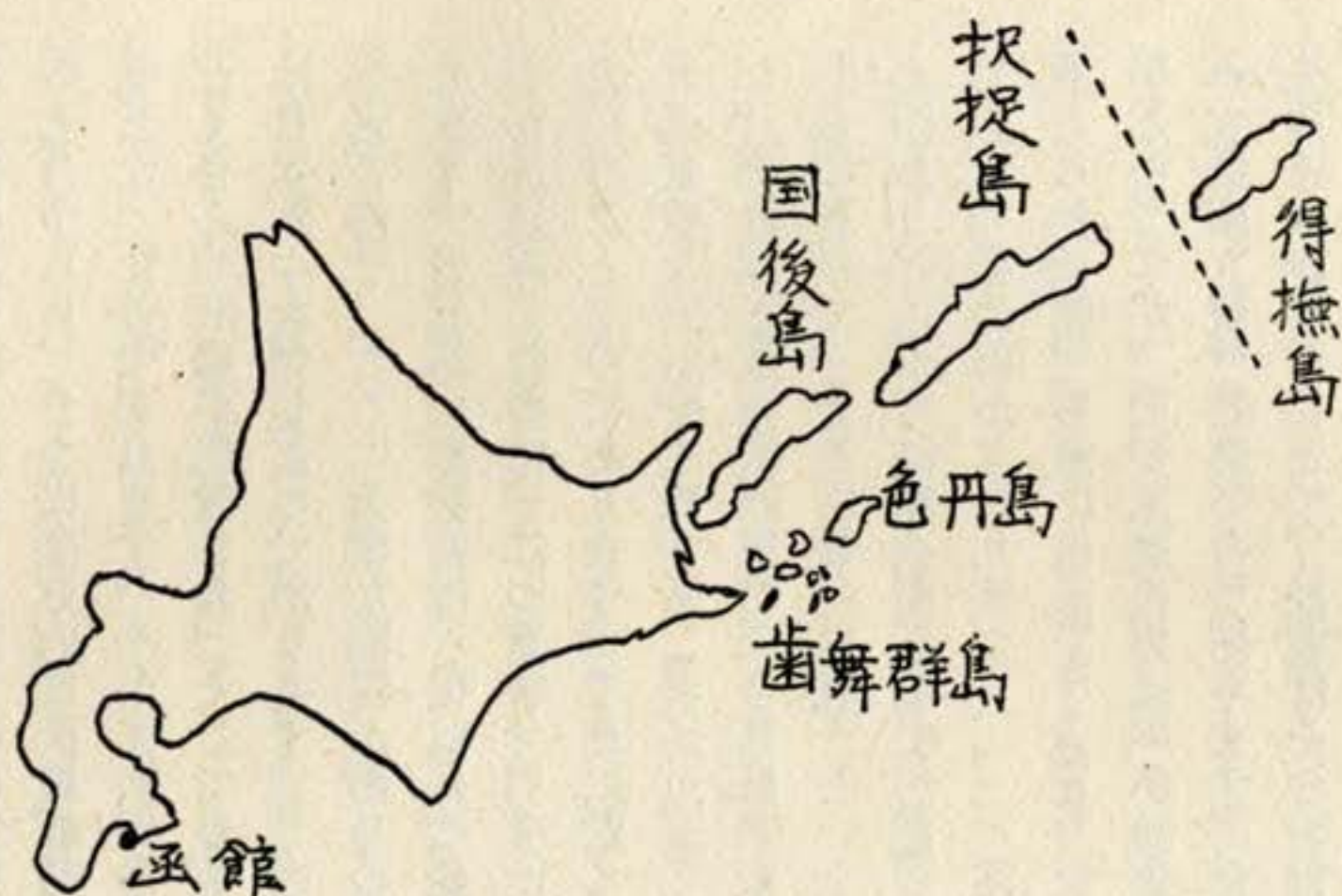
一 氷に鎖す蝦夷のはて吹雪に暗き択捉の島に渡りて土人等に 漁の業授けたり 百折撓まぬ丈夫の志 誉れは広し オホーツクの海よりも

二 たまたま露艦に捕えられ 率て行かれたるカムチャツカ 吹雪も雪も忍べども 忍び難きははずかしめ 大喝一声丈夫の憤り向けし彼等が 銃先も狂いけり

三 千辛万苦のかいありて シベリア鎖す厚氷 彼と我との胸も解け 波風鎮まる北の海 暴威と戦う丈夫の大和魂 功績は今も高田屋世に高し

これらの中に、嘉兵衛翁の業績は簡潔によく現わされております。

翁は淡路の人ですが、三十歳の頃、函館(当時は箱館とかいた)に店を持ち、そこを本拠として北方の開発を行いました。儲けた金は一人占めにせず、よく箱館地方の公益事業に投資してくれておりますが、何といっても業績の大きな一つは択捉航路の開発であります。国後と択捉の間は潮流が激しく、商船が行くのは困難でした。しかしこの辺には海産資源が無尽蔵にあって、もし国後・択捉間に航路が開かれれば、商船や大勢の人が択捉まで行って、それらを運んで来ることが出来ますから、国全体としてもこの場所は北辺の宝庫なのであります。幕府は寛政十一年(一



—北海道略図—

七九九)からエゾ地の北東部を直領地としたのですが、そのために役人として派遣されていた近藤重蔵は、この宝庫に着眼して、何とかここへ商船を入れたいと考えました。前記のように国後から択捉へ行けたらしめたものなのです。国後まではどうやら行けるのですが、そこから択捉へ渡ることが困難なのです。そこで近藤重蔵はエゾ地御用の幾人かの船頭にそのことを話してみました。だが誰も尻込みして、航路を発行してみようという人がおりません。嘉兵衛翁も御用船頭でした。重蔵は今度は嘉兵衛に頼んでみました。すると嘉兵衛は決然として「やってみましょう」と答えたのでした。嘉兵衛はまず国後島へ行き、そこで二十日ほど潮流の調査などをし、山の上から観察してみたり、小舟を流してみたりして、ついに三つの潮の流れが別々に激流していることをつき止め、その衝点を避ければ無事に船を渡すことが出来るとの自信を得、冥温丸という七十石積の船に浪よけなど

を付けて工夫し、十二分に用意を整えて、無事、択捉島へ渡ったのでした。時に寛政十一年七月十八日、まさに歴史的な択捉航路の開発となったのであります。やがて択捉島にはたくさん漁場が開設され、そこでの海産物は日本国中を潤したのであります。

ところで、ここに大事な問題があるのであります。どうして嘉兵衛は、彼以外の船頭たちが尻込みしたのに、二つ返事で引受けたかということなのであります。これに就て私は最近貴重な史料を手にすることが出来ました。それは三重県松阪市の天台真盛宗来迎寺しんじょうからのもので、ここに昔「妙有」という坊さんがおり、この方は嘉兵衛と親交があったのでした。嘉兵衛が文化九年（一八一二）露艦に捕えられた際、弟達に書置き（遺言）をしているのですが、その末尾の方に「伊勢善光寺へ宜敷頼入候」とあるのであります。伊勢善光寺とは妙有のことで、妙有はその頃善光寺の住職で後に来迎寺に移ったのでした。どう

して嘉兵衛は妙有と親しかったかといいますが、歳は嘉兵衛のほうが十ばかり上なのですが、妙有の師僧に普門という学僧がおり、嘉兵衛はこの人から梵曆ぼんれきというものを習っていたのでした。それで普門師を通じて妙有を知ったのであります。梵曆とはどういうものかといえますと、これはインドの暦法であります。わが国では普門師が西洋の暦に対して、梵曆を宣伝し、これこそ暦の根元であると説いたのでした。のちに『仏国曆象編』とか『梵曆策進』などという著書も出されました。『仏国曆象編』のほうには嘉兵衛と話を交したらしい記述も見えております。

そこで考えられるのは、嘉兵衛は単なる蛮勇の人ではなかったということでもあります。ただ我武者らに無鉄砲に危険な択捉航路の開発という事をやったのではなしに、チャントとした考えがあったのでした。当時としては全く新しい学問である梵曆までを研究しておられる、ふつうの船頭さんとは全く違ってい

たのであります。大変に学究的な人なのであります。それというのも普門というお坊さん、あるいは妙有というお坊さんと接したお陰でいっそうそのほうの学問も進んだようで、まさに仏縁のしからしむるところなのでした。

元来、嘉兵衛という人は非常な仏教信者でありました。こんな話があります。

文化九年露艦に捕えられてカムチャツカに連行された際、水夫四名も一緒でした。ところが翌年、文次という水夫が異国の地ではかなく死んだのであります。当時のロシアはギリシャ正教の熱烈な国でありましたから、文次の葬式をギリシャ正教によって出してやろうといってくれたのでした。しかし嘉兵衛は断りました。「私達は日本人です。日本には仏教という立派な宗旨があります。たとえ他国で倒れようとも、私がいる以上、仏教の法式で葬送いたします」嘉兵衛はそういつて、自分で文次に法名をつけてやり、読経引導し

てあげたのでした。『高田屋嘉兵衛事績考』の中には、その様子を次のように記しております。

「嘉兵衛、天鷲絨（ビロードのこと）にて炮褌頭巾を作り、綿花はば五尺、長さ七尺を買って袈裟状を製し、ほぼ僧侶の装をなしたれば、にわかに死者の法号を考え、春月浮名信士と号し、白色布をもって死者の衣服を作り、大工を招き五葉松にて棺を造らしめ、棺覆を製し、入棺をなし、案内者に従い墓地に至る。途中会葬する者八九十人あり。墓所に至りて嘉兵衛引導文を読上げ、茶碗に水を盛り、片手に箸をもち、仏語を唱え水をささげ埋葬せり」

なんとという立派な態度でありましょうか。海運業者は、いっどこで乗組員中に不幸が起きるかわかりませんので、船頭は多少の仏教知識はもっており、もしそんな事に遭遇したさ

いは自分等で葬送するのです。だがこの事績考を読んでみますと、嘉兵衛のそれはちょっとやそつとのそれではない、法名までつけて坊さん裸足はだしの行為であります。全く立派なものです。この文次が死んでから一カ月ばかりして、吉蔵という水夫がまた死んでおりますが、嘉兵衛は文次のとときと同様に葬送してあげたのでした。

要するにこういう事は、単に仏教の知識を生かじりしていたからとて出来るものではありません。しっかりした仏教信仰が確立していなければダメでありまして、その点、高田屋嘉兵衛翁は内外共に立派な仏教者なのであります。

翁の仏教信仰を物語る資料はたくさんあります。各漁場に仏様をお祀りした話、箱館に妙有の世話で坊さんまで連れてきていた話その他貧者への慈悲深い布施行の話など、たくさんありますが、紙数の関係で次の機会にさせていただきます。

翁は晩年を郷里淡路で過し、文政十年五十九歳で亡くなりましたが、郷里での菩提寺は真言宗でありました。だが箱館に在る間は當時箱館に真言寺院がなかった関係もあって、浄土宗称名寺の檀家となって宗門改めなどしておりました。箱館店は弟の金兵衛に差配させ、この金兵衛はのちに箱館店を全国高田屋の本店とした関係上、嘉兵衛以下金兵衛系一族の墓が称名寺にあるわけであります。金兵衛はのちにロシアと密通の嫌疑で調べられ、箱館店は関所になるのですが、幸い嘉兵衛翁はその頃もうこの世にはおりませんでした。法名はのちの追贈もあって、

高誉院殿至徳功阿唐貫大居士

となっております。

ロシアが嘉兵衛を捕えたのは、その前年露艦長が日本側に捕虜になっているので、その追還を求め翁を人質にしたのであります。し

かし翁の立派な人格は露人を信頼させ、陰悪な日露間の問題は翁の手で解決され、翁も日本に帰り、露艦長もロシアに戻されたのでありました。水戸烈公は嘉兵衛のこの快挙を賞讃して、

数ならぬいやしき民もなかなか

わが国振は忘れざりけり

と詠み、大隈重信も「ロシア人をして日本人の義気と、決心とにとめるを知り、長く我を尊敬せしむるに至りたるは、一に高田屋嘉兵衛の非凡なる人格に因るといわざるを得ず」(『開国大勢史』)と讀んでいるのであります。

日ソ間の問題は悠久な大事であります。日本の政治家も、または以外の該関係者も、嘉兵衛翁に学ぶところがあるのでないでしようか。

||新刊||

梶村 昇 著

『法然のことば』(宗祖のことばシリーズ④)

B6判 二三四頁(カルチャープックス)

定価 八〇〇円

(発売元)

〒102 東京都千代田区富士見二一六―九

雄山閣出版株式会社

||新刊||

金光寿郎 著

『杵のない世界』

―NHK「人生読本」の心暖まる世界―

B5判 二五一頁

定価 一二〇〇円

(発売元)

〒102 東京都千代田区一番町九

柏 寿 社

上州富岡と製糸



かん ゆう ぐう じん
寛 有 宮 神

(群馬教区前教化団長)
(富岡市竜光寺住職)

○ 上州といえ、国定忠治と空っかぜとかかあ天下と尾根の石と昔より言われております。上州の言葉の荒いことと敬語をしらないともいわれていますが、近世は民主中心で同じようになりました。群馬県高崎より上信電鉄に乗りかえて上州富岡駅へ下車いたしますと、私方寺の大銀杏は、かなりはなれた町角より眺めることが出来、おとなの腕で四抱いは優にある老樹であります。

○ 富岡へ下車すると又富岡製糸所の百年前の洋式建ての大工場が観光第一であります。明治五年に官営製糸所が富岡へ出来、これはフランス人のブリーナが日本政府と正式に契約し、日本に唯一カ所富岡町に工場が建設されました。適地として選ばれたので明治初年より産業経済に力に入れ、富岡市では日本近代産業発祥一〇〇年記念祭と名うって数々の行事を行いました。本年は市の公園中に工場女工の死亡した慰霊碑を建立して冥福を祈念いたしました。



—日本最初の製糸工場(現在・片倉工業KK)—

さて、工場の敷地としては藩主前田家の陣屋跡を買上げることにした。どうして富岡が選ばれたかは直接の資料はないが、付近一帯が養蚕地帯で原料が入っている。付近には石炭埋蔵が期待され、近在の山から薪の供出も容易なことなどがその理由として考えられる。

木材は近くの山から切出したが、山の木を切ってはテングのたたりが恐しいと言う地元民を説得するのは容易でなかったという。地元民の悩みはこうした迷信ばかりではなかった。

石や木材の運搬にかり出され田畑はそのため踏みにじられた。

政府工事にまきこまれるのにコリタ、住民は、国鉄信越線の誘致をこわったということもある。

しかしこうして完成した我国最初のレンガ造りの西洋建築は百年後の今日もそのまま現在は片倉工業が使用しており、びくともしない立派な建物です。

工場は出来た、洋式の器械もすえつけられ、次は女工の募集である。これが思いの外難問題だったことは、今もよく知られている。考えてみれば無理もない、初めて見るレンガ建ての大工場、機械はゴウゴウと音立てて回

り、煙突からはもうもうと煙を吹く、紅毛異人は血の色をした酒（ブドウ酒）を飲むが、あれは女工からしぼった生血だという風説は止めようがなかった。そこで工場主任は身をもって示すほかはないと考え、わずか十三歳の自分の長女を異郷からよびよせ、当時の女工は十五歳から十八歳のものが多かったがみな士族や地方官らの娘で、製糸技術を体得し郷土に帰ったときは製糸の指導者になろうとの意気込みをもつ者ばかりだった。

そのため工場では習字、裁縫、読書などの夜学を開くとともに、風紀の取締りもきびしかった。ついには富岡女工の名は郷土のほこりとまでいわれるようになり、山口県から二〇〇〇人の女子が加って女工数五〇〇名をこえた。

明治六年には昭憲皇太后の行啓を得て、富岡の名は一だんと高まってきました。

明治五年、官営富岡製糸所が設立されましたが、私の子供のころ寄宿舎にいる女工が構内の貯水池に身を投げた死んだとか、工場のすぐ下を流れる鎭川に投身自殺をしたとかいう噂をきいたものだった。

其後女工も懸命に働いたが、女工哀史に書かれた女工

たちは窮乏した農村から、一年いくらというような前借で、身売り同様にして連れて来られ、きびしい看視の中で、苛酷な労働条件で働らかされ、多くの若い女性が肺結核で倒れていった。

故郷の方にいる親や身よりの人たちも、富岡の娘から病気になったという通知が届けられても、引取りに行くこともできず、そのため浄土宗竜光寺へ埋葬するようになり、現在六十四名埋葬されております。

政府の経営が明治五年から二十一年間、三井が二十六年から九年間、横浜の原合名が三十六年間、現在は片倉工業が経営いたし、毎年盆には先亡施餓鬼回向をいたし従業員一同焼香回向しています。

○

上州というとかかあ天下で名が出ており、これも女達の働き場があり収入も多いところから主人が下手したてになつていたと言うことですが、現在は男女同権にて、コンニャクやねぎ等が名産で外にありません。

NHK前会長であった故阿部真之助さんは恐妻会の会長をして有名な毒説家であり、阿部さんも竜光寺の檀徒



竜光寺本堂：県重文の梵鐘と板碑があり、
また明治初期の女工の無縁墓がある。

です。

上州の方言もおもしろい言葉があります。

オツパメル（だます）

カツキル（切る）

クツチャブル（しゃぶる）

コジャマ（じゃま）

ゴウブテイ（太い）

シチクデイ（くだい）

ディアグロ（大あぐら）

タンコブ（こぶ）

ツンノメル（すべる）

ドウブテイ（太い）

トンドス（出す）

ハンナグル（なぐる）

以上のような言葉がふるさとの方言として使っています。

○富岡製糸所の歌

一、明治の御代のはじめより

くるまのめぐりをやみなく
くりだすまゆのいとたえず
浅間の山ともろともに
ひびきとどろく汽笛の声

二、はるけき海のあなたより

おほくのたからひきよせて
国を富ませるとみ岡の
みかぼの山は高けれど
なほも名だかき製糸場

富岡製糸工場は、建築学的にもいま残る貴重な資料といわれる。

この工場を訪れる学者、学生はきわめて多い。とくに夏休みの時には学者から小学生に至るまで、訪問者が大勢集まるという。工場の幹部は生糸の生産のほかにかうした人達の接待に追われるという苦勞話があると。ともかく富岡工場は、われわれ日本人の財産と評価されているわけだ。建築学者の学問的な判断では、現在も全く痛

んでおらず、まだ百年は保つといわれている。この建物は日本近代産業史そのものであり、業界、地元はもとより国家的な永久保存の手がさしのべられなくてはならな

いだろう。この工場に関係ある浄土宗竜光寺も新しい期待を寄せられています。

竜光寺も富岡町創設と共に最も早く宮崎から住民と共に富岡へ移った寺であり、町の近くは全部檀家に属します。富岡へ移転後は御朱印寺として歴世の名僧が富岡町の政治の善導につくした努力は大きく、富岡製糸と共に名声高くあります。

“ねんじぶつ 念持仏”

定価 二五〇〇円

(送料 二〇〇円)

○阿弥陀様と、高祖善導大師・宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯用の仏様。毎日の生活の中で、肌身離さず頂いて、この私たちの平安と幸福をお守り願います。

(発売元)

〒153 東京都目黒区目黒四一六一一二

株式会社 泰 童

TEL (〇三) 七二一六〇〇六



モンゴル仏教を訪ねて

まつ い しょう じゅう
松 井 勝 重

（アジア仏教徒平和会議
日本センター事務局長
東京・三好一言院住職）

モンゴルの六月、一雨ごとに草原の青さが増して、なだらかな山にまで一面にじゆうたんをしきつめたようになる。首都ウランバートルの南を流れるトール河の水がさがふえ、日中には平和橋の近くで子供たちが水浴びを楽しむのがみられる。

この六月をえらんで私たち日本仏教友好団八名は、モンゴルとソ連両国仏教会長の招きをうけて両国を訪問した。ソ連シベリヤのバイカル湖に近い古い都市であるイルクーツクから汽車で発ち二晩をかけてモンゴルに入る。途中、汽車はソ連仏教会のあるウランウデでシベリヤ鉄道と岐れ、セレンガ河をのぼって「雁の湖」を左に見ながら、国境の町キャフタを過ぎる。二日目の朝、窓

外に草原がひらけ人影もなく、ただ放牧されている羊の群をみる。何かはるばるやってきた感じをうける。

漸くにて町なみがあらわれるとここがウランバートルである。駅頭は出迎える人びとで一ばいであるなかに一きわ紅の法衣が目につく。私たちを出迎えてくれたラマさんたちをみてほっとする。街の中心地にあるウランバートルホテルに宿をとる。

ウランバートルの街はなだらかな山の南斜面に東西にひろがっており、人口は二十万、高度は一三〇〇メートルということである。東西に走る平和大通りの中心街は殆どが近代建築であり、東の方に住宅地がひろがり、板塀で囲まれる中に丸い天幕——ゲルが多くみられる。そ

れが近くにたっているあたらしい高層の団地とまことに対蹠的である。聞くところによれば、年輩者たちには箱のなかの生活より地に生えたゲルの方が住み心地がよいとのこと。

私たちの言うガンダン寺——正しくはガンダンテクチンリン寺は市の西北部と中心街からも近い丘の上にある。これも昔の集落づくり——「フレー」といわれる様式であって、統治者の館を中心にしてそのまわりに住民のゲルの集団があり、その西北方にラマ寺とそのまわりにラマのゲル集団がつくられる。これは、一つのラマ信者のゲルの中で、その西北角に仏壇が安置されることに通じている。

一日私たちは法衣をつけてガンダン寺にまいり、合同の法要をつとめた。境内で大ぜいの信者さんたちに取り囲まれるようにし本堂に入り、設けられた席につく。正面に釈迦牟尼仏がまつられ、あたりは布の天蓋、れんから柱にいたるまで色あざやかである。間もなく本尊前にハンボラマの高座がこちらを向き、それを下って両側の席に着座するラマさんたちによる勤行がつづけられ、一定の抑揚のある読経を耳にしていると、日本のいずれか

の寺での勤行を聞くかのようなのである。読経の区切りになるのか、とたんに太鼓やラッパなどが一せいに鳴らされてもりあがりを見せる。このあとを私たち代表団による勤行が団長の修法、表白から団員の各宗派の偈文、念仏、題目、陀羅尼文とつとめた。

モンゴル仏教を私たちはラマ教と呼びならわしているのであるが、ときに先方が言われる通り日本と同じ大乗仏教である。モンゴル仏教は約三百年前にチベットからもたされたチベット仏教の改革派となるツォンカパの黄帽派の仏教であると聞く。ガンダン寺の境内にはそれぞれ歴史をもつ諸堂宇がたちならんでいる。このなかの図書館で学者ラマさんたちと懇談する日程を私たちのために準備されていた。私たち代表団の団長宮坂宥勝師はご承知の通り仏教学者であり、とくにチベット仏教の研究者でもある。そのこともあってこの機会がつくられたことに大いに期待する。その図書館に案内されたところは、私たちのみる経蔵であるのだが、実際には図書館として常時使用されているものと思われた。館主のラマさんに紹介され壁面の棚に一ばいに絹布に包まれた経本がある書庫のなかで、展示されている経本について説明を

うける。

ここで宮坂団長等は、一つの重要な目的をもっていた。それは先にモンゴルを訪問した代表団が大蔵経版のなかで「幻の經典」とみられている「クローン版」あるいは「フレールバル版」の存在を耳にしたことであって、その存在を何としても確かめたいというのである。私にはそれが何故それ程重要なことであるかを理解するまでには団と行動をとるにやるなかつた。クローン版といえ、ここウランバートルは解放前に



—宮殿博物館・仁王門（ウランバートル）—

はたしかにその名前で呼ばれている。ここでたしかめな
いで他でできるわけではない。

その書庫のなかで館主のラマさんたちを前にして机の上に展示されている經典の冊を見ながら、私には書かれている文字がチベット語であると言われて知る位であるが、それが写経されたものであると言われてなおおどろく。別室で専門のラマさんがこの写経をしているのを見て、ラマ寺の一つの修道を知ることができる。

時をみて団長から館主に「クローン版」の存在をたず



—仏学院の入口（ウランバートル）—

ねると、先方はそれ程不思議に思うこともなく手前の経本を示しそれがクローン版であると返答された。団長たちは幾度にも念を押して確認しようとする。その上にぼう大な版木が別の書庫に蔵されていることがつけ加えられた。なにか失われていたものを見つけ出したようにうれしくなる。

別室にて、みなうちそろってご供養にあがったので、ほしぶどうのまじった珍らしいご飯をいただき、信者からこの日ラマさん全部にあげられたお菓子の包みが私たちもわけられる。経蔵を私たちが出ますと、待ちかまえていたように信者さんたちが私たちに頭を差出し加持を求められる。私たちは掌を一人一人の頭にあてる。親ごさんがつれている子供にもと。このあと私たちの掌のなかはお賽銭で一ぱいになる。ときにお札をつかまされる。それが通訳によれば「私の亡き兄弟のためにご供養下さい」とのことと恐縮する。

また山門のわきの木戸をくぐると中に大ゲルの客殿がある。ここでは招宴や数十人の会議もできるということで中の骨組みは朱で塗られてあざやかである。私たちは帰国に際してボラマに招かれたお別れの宴がここで催さ

れた。

横の門を出ると、向かいに最近新築された仏学院がある。この建物のなかにアジア仏教徒平和会議センターがある。来年六月ここで発足十年を記念して開かれる第五回アジア仏教徒平和会議総会の会議場をみせてもらおう。

經典朗読の声が聞えてくる二階の教室で、夏期特別講習をうけている仏学院生約二十名の若い人たちに会う。モンゴルでは小中学校は六月はじめから学年末の夏休みに入っており、ただし大学は試験最中であった。三年おき位に十年かの義務教育終了したもので試験をうけて入学すること。お隣りのソ連仏教会からも幾人かが留学している。ラマさん等の教授陣とその担当課目の紹介をうけ若いラマの養成のなかにモンゴル仏教の今後を考える。

私たちはウランバートル市内にあるガンダン寺の外にかつてこの国の活仏が残した寺院で、今は博物館となっている二つの寺廟と貴重な幾多の資料がある美術博物館、国立図書館等を参観し、モンゴル仏教にふれ、その一端を知ることができた。私たちの報告はまだまだ整理されていないが、今後の両国仏教の交流と平和のための



—ソ連仏教会イボハガ寺における合同法要—

連帯をつよめることを期したいと思う。

モンゴル仏教センターとしてのガンダン寺の活動は次のように記されているが、これをみてもモンゴル仏教の現況をよくかいまみることができる。

「仏教の歴史、伝統文化の研究、調査、経典、文学の翻訳にたずさわる一部の僧を除いて、宗教の自由を保障するモンゴル人民共和国憲法に従い、仏教信者のために毎日勤行を行う。

国家の社会発展計画を理解し、これを道徳的にも物質的にも促進する。

世界平和維持、戦争防止、軍縮達成を目的とするすべての祭典、会議に積極的に参加し、これを促進する。

ガンダンテクチンリン寺の僧、信者はみな生けるものの幸福、世界の平和、全人類の幸福のための仏陀の教えが実現されるよう祈っています。

武器持ち戦うものがすべてが手に花を持ち兄弟として相まみえんことを祈る」

〇〇江戸後期の宗門歌人〇〇

良洗上人の研究 (一)

吉^{よし}田^だ光^{こう}覚^{がく}

(岩手県紫波町極楽寺住職)

(一) 芸術僧の顕彰

地方寺院を探訪して、一步、境内に入ると大低、塙基や武基の彰徳碑を見受ける。それらは殆んど民間人が多い。然し、寺院住職の中にも、たとい一地域にせよ、画家、彫刻、書家、文人等が居られた筈である。それらの人物は唯単に興味に生きられたというだけでなくて、芸術即布教の信念の下に夫々の天分を発揮された方々と思うのである。

時代が経つにつれ、地域からも忘れられがちではある

が、そうした埋れている当代の人物を発掘し顕彰するとは、私共に課せられた任務でもある。かかる意味合いから私は、私に若干ゆかりのある、江戸時代後期に生きられた良洗上人の伝記をまとめようと心掛けつつ、今日まで果せないでいたのであるが、最近、漸く、上人の著作を発見したので調査不充分ではあるが、一応紹介させて頂くことにした。この機会に宗門の各センターに調査グループを誕生させて、各地の芸術僧等を洩れなく紹介されたら、高祖の御遠忌を控えて一大報恩行ともなろうかと思う。



(二) 東北の両画僧

本題からは一寸ずれるが、現在、私の寺には大幅の涅槃図がある。その下方に岩城林蔵寺住讃蓮社良歎謹画の銘がある。先年同寺に照会したところ、百三十年前の土佐派の画伯で、江戸で修行、仏画を学んだ。殊に涅槃図を多く画いたらしく、現在判明しているだけでも福島梁川の称名寺、岩手は拙寺と松岩寺にあり、北海道には相当数あるらしいとの返書を戴いた。

当寺の先々代、味方豊憲和尚は俗に「爪書き」、学名は「指頭画伯」で当地では名を知られていた。山水も画き立派な画賛も自ら記されたが、師は蟹かにの絵が得意で、各地に散在している多くの作品を拝見すると、実に見事で、蟹の行列など描写の優秀さに驚歎するだけである。没後四十余年を経過した今日、なお、法要後の会食に列すると老人の口から必ず上人の話題を耳にするほどである。師は大酒家であった。素手では絶対に画かぬ。画筆を握る前には必ず二升三升を空にされたという。まことにユーモラスな和尚で、奇行も多かったが、名人達人は

皆然りなのか。五十年忌には遺墨展を催したい。

(三) 伊達五山の一寺

私は縁あって昭和九年、福島教区中央組、桑折町観音寺に入籍した。矢吹慶輝博士や傑僧無能上人の排出された桑折町には平泉討伐に従軍、勳功を樹て、頼朝に伊達一円を与えられた伊達家の初祖朝宗公（満勝寺殿覚仏念西大居士）の墓所があり、墓所から二キロの地点、伊達氏の居城下に観音寺がある。

観音寺は四代の城主政依公が亡父義広公（法名観音寺殿）の追善のために、観音堂（弘仁仏安置）の別当として建立された寺院であり、東昌寺、満勝寺、光明寺、東福寺と共に伊達五山の一寺である。この中三ヶ寺は仙台に移転され、地元に残るのは二カ寺のみである。

この観音寺は、当初は天台宗、寛永七年に浄土に改宗以来、十九代を数える。傑僧が多く排出した。中でも十代の祐音和尚は彫刻に秀れ、阿吽の仁王尊は丈一丈、当時横綱クラスの郷土力士、七角利平をモデルにした自作の尊像で、銀杏の一木造である。

(四) 尊阿さま

仁王門をくぐり、石段を上ると、拝殿観音堂の境内の片隈に小さな句碑が建っている。

「飛咲きの花に朝日や薨^{いら}越し」

明治八年建立、これが標記良洗上人の句である。

桑折地方の人々は尊阿さまと呼んでいた。桑折地方では、終戦前頃までは、尊阿さまと言えば知らぬ人がない位であった。

時の過去帳で調べて見よう。良洗上人は観音寺十三世である。始めに祐空と称し、後に祐豊と改名した。弘化二年十月十二日大安寺(町内)より転住、祐昌の法嗣とある。祐昌は十二世で、後に記すが、この上人亦当代一流の歌人であった。出生地は兩人共山形県で兩人の関係は未だ定かでないが、肉の兄弟とも思われる。祐豊即ち尊阿上人は山形県東根市大字蟹沢(現在)の産であることは明かだ。阿部半兵衛の次男ではなかったかと思う。長男

は長兵衛、三男林兵衛は判明している。

楯岡の本覚寺で専称寺良孔上人によって得度、修行したらしく、先般同寺に照会したところ、同寺に上人の著作『東桜集』が二冊あることが判明、更に有難いことに同寺檀中で、尊阿上人の師匠か実兄か、兎に角、観音寺十二世良威上人石翁祐昌和尚の研究家があり、和尚の俳名一具の遺句をまとめた『一具全集』を発行されているとの報をえたので、九月早々、直接、両上人の足跡を調査に赴く考えである。

師僧が俳諧の大家であっただけに、その感化をうけられたと思われるが、俳諧の実際の師匠は、奥州の四天王の一人と称された宮城県白石の乙二とも言われているのでこの方の調査も今後、進めたい。文政年間に江戸に出て、江戸三大家の一人となったとの説もあるので、この点の研究も今後の課題である。嘉永六年七十三歳で遷化された。

(五) 良洗上人の著書

天保十年、『一解集』刊行、上下二巻

嘉永年間、『東桜集』五冊(?)刊行

(在四冊所有者判明)

右の著作の外、上人の投句が掲載していることが判っている当代の図書としては次の如きものである。

○『乙二七部集附録』○『春の浜』○『送曲集』○
『有耶無耶集』○『亀躍集』○『草鞋塚集』○『そて
の羽』○『俳諧海内人名録』○『雁默集』○『筆たよ
り』○『冬椿集』○『そのうつき』○『磯とまり』○
『被等物斗集』○『吳水句帳』

なお上人の俳諧名は次のように数多く使用されたのも
珍しい。

無礙庵、梅遅老人、破飯囊子、西窠、良洗、片雲子、
尊阿、遜阿。

(六) 『一解集』序

ここに上人の著である『一解集』に良威上人祐昌和尚
こと、一具から寄せられた序文を紹介してみよう。

儒釈道の三ツは、一心にをさまり、一心すなはち万
法にはひこる。されハ鳥のあとをあやつり、ことはの
玉をみかきて、拵ふ人ハいふもさら也。後素焙芳琴棋
のたくひにいたる迄、あらかしめ一より出て三によら
ざるハなし。これにはつるる技芸は、波にたたよふう
き草の、花うるはしといへとも、何をか見、きくところ
の根底にはせん。わかはいの先哲と指さるる人人、
豈そのもとつくとくところなからんや。

ここにみちのく宮城野のほとりなる木下に、露の世
をかこちて、かすかにすまひなす西窠法師、誦経念仏
の余暇、芭蕉老人のさひしをりをしたひ、それとはな
しに、その世にきこえて、ひとふしありとおもへるも
のを、筆まめにかいあつめおきたるを、梓に○してこ
ころさしをおなしうする海宇の友垣におくりて、まわ
りをしたしうせんと也。そのはしかきせん事をこはる
るに、老の日影の葉楡にせまりて、ものむつかしけれ
と、ひとまつとてひらき見るに、句々みな三道にたよ

らさるなく、ことごとく一実相よりいひ出さるハなかりけり、ここにおきて、おもはす案をはたとうちて嗟嘆す。

天保己亥中伏後二日

一具庵主人

(七) 『一解集文跋』

としよ里の〇〇は連歌を好まずして連歌をすて給はす。人の美をのこさしとの御心なるへし。その俳諧の連歌といへるは、けたし甫によきはせをの翁にいたりて、たいせいせり。

ここにおきて薪おへる山かつまでも、花の下にてハかならず頭をかたむくる事とはなりにけり。

ここに私が法の道のをしへ子に尊阿とよへるおのこ有り。そのさひはなるほとりより、観読ものかく事を好てはけミけるか、その身の弱きより長くもあらぬ世の中をさとり、あわれたのしミてあらましと思ひけん。いま江戸のおほきのなにかしの町に、櫃の実のひとりぬけ出て、灘の名の世にひひきたる一具庵の翁を

学のおやと頼みて、はいかいの道に参入たちにけり。

ある日尊阿わか草庵のとほそをたたきて、これの冊子のはし書をなんこへりける、俳かいは、それかし、もとより学ハさる道なり。学ハさる道に、はしかきくはへんことは、末の松山、すえの世までのものわらひなるへしと思はるれと、磐梯の山のいはてやみなんハ、中中に此道のおもむきにならずと聞ままに、あなかに又手をとることとなりたるハ、天保の十とせといふ年の霜月

陸奥国伊達郡桑折里人 長閑房石翁也

(つづく)

◇◇ "浄土句集" 欄投稿要稿

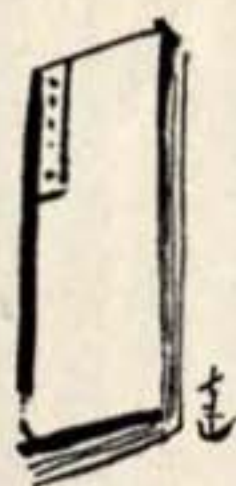
一 ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一 投稿先――

。〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

。〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛



念佛ひじり三國志

(五三)

— 法然をめぐる人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



成覚房幸西の過激とも思われる政治的な動きに比べ、叡山以来のライバルだった聖光房弁長は篤実に法然教学を学んでいた。

幸西ほどの才気は、たしかにない。鈍重なほどである。弁長の血は、筑紫の野づらで醸成された植物の精でみだされていた。反応は鈍いが、ひとたび感受すると、とことん粘り強く追究してゆく。視線をそらすことがない。比叡山天台学の伝統のなかで育ち、未来の学匠を保証されたのだが、法然の新しい仏法に触れるや、敢然とす

べてを捨てて下山してきた。あとはもうひたむきに法然の像だけを凝視し続けた。

植物の生存機能は「根」となって大地の底へ伸びるのである。地上に現れる枝葉は、その末節に過ぎない。地味に、あくまでも篤実に、基根を強靱にさせることだけに努力をつみかさねた。

法然の高足たちのなかにあって、聖光房弁長はたしかに異質な存在だった。

外側からの法難、内部での諸派諸流の分裂、あの激動期に彼はひとり圏外に立っていた。遠い九州の地で、篤実に念佛教化のみに専念した。京都へ戻って、内外の粉

糾に身を投じようとしなかった。

しかもこの聖光房弁長が鎮西上人と呼ばれ、正統浄土宗にあって法然を継ぐ二祖と仰がれたのは、なぜであろうか。植物の精の強靱な底力を想わぬわけにはいかなう。歴史を彩る人たちは派手に、変幻自在に動きまわる。しかし、その收拾者は黙して動かざる人に帰納してゆくものである。

当時、法然の周辺にいた高足たち。彼らはそろって貴族の出身であった。

黒谷以来の親弟法蓮房信空は葉室家の直系、大仏復興長官行隆の息だったし、安楽房遵西は大外記中原師秀の嫡流で後白河法皇の側近に仕えた。若い善恵房証空は左大臣久我通親の猶子である。成覚房幸西にしてからが、平家の門流だった。

彼らの血流には、多かれ少かれ権力志向の血球が潜在していたはずだ。同じ信仰の追究にあっても、視線は周辺に散ってゆく。都会育ちの鋭敏な神経も、念仏をしているだけでは物足りぬというエネルギーを掻き立てる。酸性が濃度な体質、と言えるであろう。

だからこそ、念仏信者の増大につれて、新しき教団の

前号のあらすじ

元久二年（一二〇五）十月、笠置の解脱房貞慶によって、専修念仏を弾劾する「興福寺奏状」が草され、十二月、院に提出された。これを受理した藏人頭三条長兼が、京都梅小路の南堂供養の導師を勤めていた貞慶を訪ね、事情をただしているほどに、意外な上奏であったのである。新興の専修念仏宗団と旧仏教との対立、と看做すには、奏状の起草者貞慶の名は奇異の念を懐かしめる。貞慶は法然上人に好意を寄せこそすれ、論駁を加える立場ではなかった。俊乗房重源との仲も緊密で、法然の周辺には縁故者も多かったのである。

「興福寺奏状」の背後には、内部告発の匂いが濃厚に感じられる。成覚房幸西を筆頭とする急進的な念仏ひじり達の行動を憂慮する俊乗房重源の姿が、「興福寺奏状」の行間に窺われるのである。

設立に東奔西走しはじめる。

幸西や安楽房らの過激な行動がそれを実証していたし、ラジカルな彼らを忌避した善恵房証空らは、天台旧勢力に密着し何とか体制内において合法新教団を、と画策したのである。

聖光房弁長は、激動期のまっただなか、元久元年（一二〇四）の八月、法然のもとを辞して鎮西の旧里へ帰ってゆく。

「ツイニ学成り、功ヲ経テ……」

と「四十八卷伝」は故郷に錦を飾った如き筆致になる。また、鎮西の地へ帰郷した弁長が以後は地方教化にのみ専念したように受け止められている。

弁長の鎮西帰郷は、そんな消極的な行動だったのであろうか。

この元久元年、弁長は四十三歳であった。奇しくも法然が専修念仏に回心し、比叡山を下ったのと同じ年齢だった。弁長自身だけの発意だったか。そこに法然の下命、依頼があったかどうか、分明ではないにしても大きな目的があつての鎮西行きと推量したいのである。

その大目的とは何か。

渡宋である。鎮西の地から大陸へ渡航する悲願を胸に秘めての帰郷だったと考へたい。

宋に至って、宗祖善導大師の遺蹟に参じ、許されれば大陸浄土教団、善導の末流たちととじかに接触してくることだ。これこそ完璧なる「師資相承」ではないか。

鎮西大師伝は「上人帰国後、入宋、終南山悟真寺ニ至ル」と書く。その事実はなさそうだが、強烈な彼の意志だけは伝えている。

大陸渡航の出発地である筑後で待機、弁長はかの地の現情を精力的に調査していたにちがいない。

だが、時代は利さなかった。すでに宋政権は末期に至り、北方から蒙古族の侵入で府そのままに乱れていた。渡航可能な状態ではなかった。ましてや善導の遺蹟巡拝など、及びもつかぬことであつた。

弁長は、筑後に善導寺を建立したり、自己主宰の念仏結社をあえて「善導宗」と名づけているのも、この悲願欣慕を托したからであらう。

こうして推量をかさねてくると、弁長の鎮西行きに、いよいよ法然の意志が強く働いていた、と考へないわけにはいかなくなる。

「偏依善導」は、承安五年の念仏帰入以来、法然の変らざる基点であつた。夢感での邂逅はナマぬるい。誰かをじかに「善導の地」へ派遣しなければならぬ。

選ばれたのが聖光房弁長であつた。

では、なぜ弁長はその事実を遺告しておかなかったのか。

理由は簡単であらう。

師命を実現し得なかったからである。

弁長自身も彦山の般舟三昧道場で、建暦二年三月、法然の四十九日忌に善導大師と夢感で邂逅している。

これあるがゆえの「二祖」である。単なる地方教化の結実だけでは、法然の正統を継承したとは言えぬはずである。

弁長の特質を「植物の精」と書いた。大地に深々と根をおろしてゆく篤実な行動性だ、とも紹介した。

その「根」とは師法然の意志を寸分もたがえずに実行に移す点にある。

篋(の)ヲタムルニ片目ヲフタギテ、ヨクタメラル
ルヨウニ一向専修モ横目ヲセザレバ、トク成ルナ
リ。

「一言芳談」が紹介している弁長の言葉である。

矢竹を直立させるには片目をふさぐと、うまく出来るように、念仏でも脇目を振らなければ早く成就するであろう、という意味だ。

弁長は法然の像だけを片目をつぶって凝視した。その言葉だけに耳を傾けた。

法然の「偏依善導」をそのまま受容した。新しき教団の樹立に、師資相承として渡宋して善導の遺跡に参ずべし、と聞けば、弁長はためらうことなく鎮西の地へ走ったのである。そこで生涯、渡航の機を待ち続けたのである。こうしたひたむきな聖光房弁長の実像が、ともすると見失われがちなのは残念である。「偏依善導」の法然を、「偏依法然」した鎮西上人は、やはり浄土宗正統の二祖としての資格を、ゆるぎなく持ち合わせていたことになる。鎮西派は、決して専修念仏における一派閥ではなかったのである。

二二

盲目の琵琶法師生仏は、そのころ広隆寺の僧房に住みついていた。

——太秦の広隆寺。

開創は推古女帝十一年(六〇三)聖徳太子の発願で建立された寺だと言われる。大陸から帰化してきた秦氏の菩提寺となった。

秦氏は中国から朝鮮半島を経て渡来したが、先祖は秦(しん)の始皇帝に発すると称した。学者によっては遠く

＜太秦・広隆寺の弥勒菩薩＞



西方の国、イスラエルからの流浪の民だと推断する人も
いる。

秦氏は古くからこの一帯に住みついて養蚕を成業とし
た。衣服文化の根をおろし、やがて平安に遷都する「先
乗り」の恰好になった。文化や経済が政治をリードする
時代が到来したのかも知れない。

広隆寺には有名な弥勒菩薩像がつたわる。西欧風に右
脚を左腿上で組んだ坐像だ。このスタイルが西域神、秦
氏をイスラエル流民とする根拠になったか。

当時の広隆寺は本堂を上宮子院と称して、聖徳太子自
作の木像を安置し、奥院の桂宮殿は八角の稜形をなして
いる。中央に十六歳の太子像、左右に如意輪観音と阿弥
陀像を配した。

秦氏の祖神を祀る太秦殿は漢女呉女の像を並べエキゾ
チックな雰囲気を堂内一杯に立ちこめさせた、と旧記は
誌している。

境内は二十二町九反一畝一步の広大なもので、山城国
最古で、最大の規模を誇ったらしい。

ただし、それは保元平治の乱以前の話で、都が戦場と
化してからは荒廃の一途をたどった。それと、スポンサ

―だった秦氏も平家の衰亡とともに著るしくその経済力を減退させていった。

九条兼実の日記「玉葉」には、

女房密々ニ三ヶ寺ニ参ズ。広隆寺、六角堂、行願寺ナリ。

こんな記事が治承二年以後、しきりと散見する。習慣的な参詣であろう。密々ニ……も公式ではないぐらいの軽い意味に受け取るべきだ。

わずかに事件らしいものとして、広隆寺別当と住侶の対立関係に触れている。これとても「伝聞」であって、廟議で取り上げるほどのことではなかったらしい。

秦氏と言え、法然の母は出自がこの一族である。夫漆間時国の横死後、この女性はどうなったのであろうか。京都へ登るわが子法然を国境に見送る画幅を残すだけで、資料は痕跡すらない。

法然が黒谷から下山して、在野生活を始めるにあたって母の縁故からその資を秦一族から仰いだのでは……という憶説もあるが、釣り上げるべきひとすじの糸すらない

い仮空の説だ。

「没後起請文」を披見しても法然はつねに施物関係には机帳面で、私生活は極端に切り詰めていたらしい。

法然自身ではないが、彼と最も長い期間にわたって生活を共にした法蓮房信空の晩年を「一言芳談」はこう伝える。

浄土谷ノ法蓮上人ハ資縁省略ノウエ、形ノ如クノ朝喰シ、往生極楽ノツトメニ忘ラレテ世ノ常ナラズ。コレガタメニ、コレヲ営ム。念仏、心ニ入ルトキハ飯ニモ非ズ、粥ニモアラヌ体ナリ。年ニシタガイ日ヲオイテ容願衰エ身カツキヌ。

良友タズネ来タリテ訪イテ、返事云ワク

西ヘニクスジ一ダニタガワズバ

骨ト皮トニ身ハナラバナレ

秦一族の財力をたのむ必要もなければ、前に触れたように秦氏自身がこの時代、結束を失って遁息しつつあったのである。

法然が息を引取った建暦二年正月二十五日の前日、午

時に紫雲がおひびただしい層をなして東山大谷の禪房にたなびいた、と法然諸伝は記している。

西山、水ノ尾の炭焼き十数人、また広隆寺から下向した禪尼がこれを目撃した、と添える。

見聞ノ諸人随喜セズトイウ事ナシ。

広隆寺の禪尼が誰であったか、詮索するほどのこともない通りすがりの人であろうが、何となく思わせぶりである。

ところがこの広隆寺、法然の死後十五年目にあたる嘉禄三年(一二三二)になると、俄然密接に関連してくる。

その六月、比叡山の衆徒が大谷にある法然の墳墓をあばくべく襲来するという報がつたわった。門弟たちは遺骸を掘り出して、嵯峨の二尊院へ運んだ。だが、そこは法然とのゆかりが深く衆徒に察知されそうなので、広隆寺の一隅に埋めた。この地が、後に西光寺という寺になった。

六月十八日のことで、法然の遺骸は翌年の正月二十五日までとどまり、十七回忌の命日に再び西山栗生野の光明寺へ移され、荼毘に付したのであった。

法然の遺骸が広隆寺の一隅に運ばれたときだ。周辺の荒れ寺や野に棲む念仏ひじりたちが肅々と集ってきた。その数は千人を越えたと言われる。

念仏禁制の時下である。彼らはひっそりとかくれ、同朋仲間も作らず、ひとり静かに念仏をとなえていたに違いない。

どこからか法然の遺骸が遷されることを聞き知り、誰が号令をかけるでもなく集ってきたのである。後世の史家が「嵯峨門徒」と呼んだひじりたちである。

しかし嵯峨門徒はこの時点に及んでこつ然と湧き出たわけではない。法然の在世中から、泌み水が野づらをひたすように、じわじわとその数を増していったのであろう。

なぜ嵯峨野の地がえらばれたのか。

そこは、無名の庶民大衆の墓地であった。民衆は肉親の亡骸を嵯峨野に埋め捨てた。洛内に特定の墓地なぞ求め得べくもなかった。

愛しいわが子やわが夫の墓参をしているうちに、きびしい現実生活を忘れてしまいたくなる。念仏をとなえつつ愛しい骨肉と来世の浄土で語り合う明け暮れに魅かれる。

そんな俄か道心、ひじりたちがきわめて自然な形で発生したようである。

春の野には今年の草花が新鮮な匂いをふりまいてゐる。盲目の生仏は嗅覚が常人より鋭い。草花の姿は見えず、なくても包いで実像を掴むことが出来る。

植物の鮮烈な包いにまじって、ひとすじ香が漂ってき

た。

生仏は足を停めて、数歩先の草むらへ声をかける。

「どなたを埋葬しているのかな」

若い男が頭をもたげてふり向いた。

「やや子です」

「可愛想に。幾つだったかな」

「生まれて五カ月」

「疫病にでも……」

「これの母親が、逃げよりました」

「なぜ？」

「わしやこの子を嫌って」

「別の男が出来たのか」

「多分、あの男だと思います。わしが商ないで若狭へ干し魚を仕入れに出かけた留守に姿をくらましました」

「……」

「この子は乳も与えられず、若狭から戻ってみたら、荷の干し魚みたいになって死んでおりました」

若い魚屋はわが子の亡骸を、今ひとりで埋葬しているのである。無理をして手に入れた香にちがいない。魚屋とはおよそ無縁な匂いだった。

三日ほどして、生仏は再び同じ野原を歩いた。また、あの香が漂っている。

「今日も来ているのかね」

「昨日もですよ」

「忘れられないんだね」

「忘れていいもんですか。わずか生後五カ月で死んじゃったんですよ」

「？」

「この子の顔をおぼえているのは、この世でわしだけなんです。いや、もう一人いる。彼奴だ。あの女だ。でも奴は、忘れようとつとめているにちがいない。となると、この子はわしの……」

記憶のなかだけでしか存在しないのだ、と若い魚屋は言いつのる。

この主張が彼の人生に一つの進路を確立させてしまったようだ。彼は五カ月しか日の眼をみなかった愛児のためだけにすべてをささげた。嵯峨野から離れようとはしなかった。

広隆寺の僧房で、そこに住む僧たちの賄いをする下男になったのである。

しかし、生仏が嵯峨野へ来たのは漫然と世捨て人の毎日を送るためではなかった。明確な目的がある。その界限に棲む念仏ひじりたちに請われて移り住んだのだった。

三

嵯峨門徒が念仏門の史上にきざんだ足跡として六時礼讃の完成を黙過するわけにはいかない。

六時礼讃は唐の善導大師の作、としてこの国へもつたえられた。晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜、と一日を六つの時間帯に分けて、阿弥陀仏を中心にして諸仏諸菩薩の救済の徳をたたえた叙情詩である。妙なるメロディがそれに付された。

兼好法師は「徒然草」の二百二十七段でこう解説する。

六時礼讃ハ法然上人ノ弟子、安楽房ト言イケル僧、経文ヲ集メテ造リテ勤メニ、シケリ。其ノ後、太秦善観房トイウ僧、節博士ヲ定メテ声明ニナセリ。「一念ノ念仏」ノ最初ナリ。後嵯峨院ノ御代ヨリハジマレリ。法事讃モ同ジク善観房ハジメタルナリ。

善観房がどういう僧か、伝は不詳だ。ただ「太秦」が広隆寺を指していることは間違いない。

安楽房よりおこって、嵯峨野で節博士、メロディやその音符が完成した、と言いきるのである。後嵯峨帝紀だから寛元年間である。法然の死後、四十年ほどを経ている。

六時礼讃の完成、と書いたが、この言葉は「公認」と置きかえた方が理解し易いであろう。

念仏禁制――

なかでも六時礼讃は大衆をまどわす妖しい施律、風俗靡爛の元凶として、断圧者たちから目のカタキにされたものだ。

建永の法難を機に、洛中の中心部や東山方面が根こそ

ぎ一掃された六時礼讃は、嵯峨野の念仏門徒たちの間でひっそりと唱え続けられていたのである。ただ継承されただばかりでなく、これまでの断片的だった内容が集大成され、今日のそれに近いものに完備されたい。それが後嵯峨帝によって公然と興行を許されたというのである。

後嵯峨帝は六時礼讃と格別に深い因縁でつながれる。

その帝紀に公認されたということは、これも歴史が持つ「沈黙の主張」であろうか。

その因縁についてはあとで触れる。

兼好法師が六時礼讃を一念義と直結させているのも興味深い。

六時礼讃に集った男女は、夜を徹して歌い尽す。その艶なるメロディに陶醉し、いつか淫らな行動へと侵犯してゆく、というとかくの噂があった。一念義も男女交合の極致を法悦、仏と人間との密着情況と曲解され、喧伝されたものだ。

六時礼讃を一念ノ念仏とした兼好法師の考え方は、そんな風説に根をおろしていたに違いない。

後嵯峨帝紀をむかえる以前、六時礼讃の施律は完成していたはずである。

盲目の琵琶法師生仏は、すでに法然の委嘱を受けて、この礼讃文の音曲化を大和入道らと共に練り上げていた。

だが、入宋した重源が法然にもたらした六時礼讃文はその一部に過ぎなかった。その後になって、正式な外交ルートを通じて完備した経本が宋から後白河法皇へ献ぜられたのである。

法皇は、それを嵯峨の広隆寺へ納経した。しばらくは経蔵に眠ったままで存置されていた。

後白河法皇と広隆寺との関係は、治承二年、広隆寺別当寛敏と住侶たちとの対立抗争を調停したあたりから深まった。この事実が「玉葉」が裏付けている。

法皇は荒廃した広隆寺の復興を構想されたようだが、実現には至らなかった。六時礼讃文の納経も、復興構想の一環とみていいだろう。

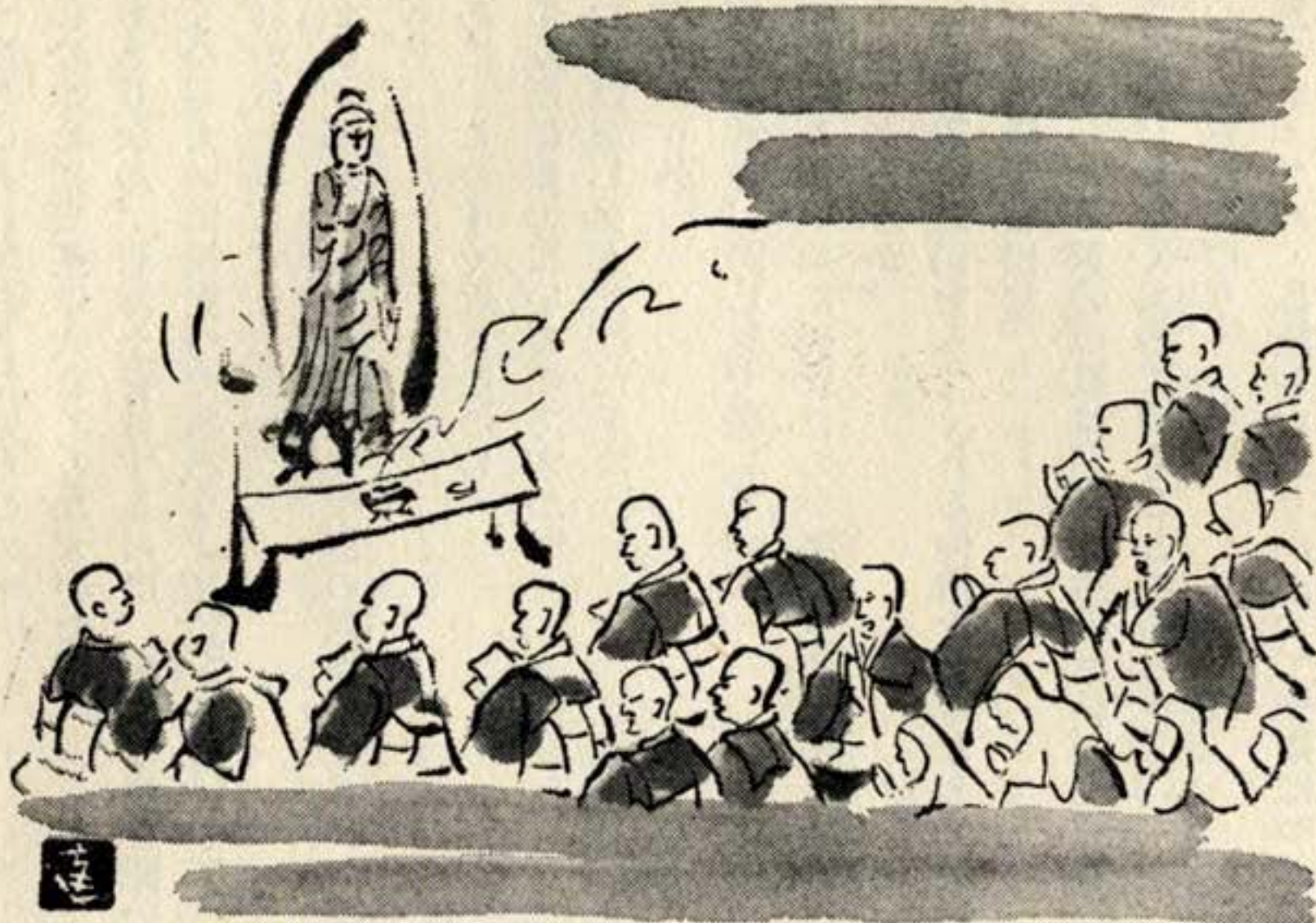
広隆寺の経蔵に完備した六時礼讃が眠っている事実、いち早く着目したのは安楽房遵西であった。

生仏や大和入道らを広隆寺に移り住ませて、その節、博士を急がせた。

なぜ急がねばならぬのか。

「来年の春にはな、院の十三回忌法要を盛大におつとめ

＜六時礼讃の大合奏＞



する計画だ」

広隆寺の僧房へ現れた安楽房は、急ぐ理由を生仏たちに告げた。後白河法皇の十三回忌法要で完備した六時礼讃を歌いあげ、天下の耳目を念仏一門に引きつけようと思図しているのだった。

すでに六十名をこえる若き男女を集め終えた、と安楽は得意顔だ。

「いずれ劣らぬ美男美女ばかりだ。容子だけではない。声も……」

一品ぞろいだ、と言う。

念仏は広く下民大衆の間にひろがらねばならない。その導火線となるものは、頭脳理智ではなくて感覚や情緒で大衆を強くとらえる。それにはメロディに乗った六時礼讃こそ最高の武器だ、と安楽は信じて疑わないようである。

若い美男美女を僧形にし、美声の大合唱だ。しかもリーダーとなる安楽房遵西は「当代、日本第一の美僧なり」とうたわれた男である。天下を陶醉させる条件はととのっている。

「盲しいの目に美形はとらえられませぬが、その美声だ

けは一度耳に入れておきたいものです」

生仏の求めに安樂は大きくうなずいた。

「さもありなん。節博士を付するのに、生まな声を聞いておくのも大いに役立つであろう。これから案内しよう」
「これからと申しても……」

生仏は夕暮れの気配が迫った僧房の窓へ閉ざされた視線を投げた。

「なあに、このすぐ近くのじゃ」

「この近所に集っているのですか」

「うむ。ただし女人だけだな」

「女人ばかりが」

「十数名は常時、同じ房で暮している」

嵯峨野の草深い地に美女たちが集団生活出来る場所なぞあるのであろうか。

生仏は身辺の面倒をみてくれる侍僧をとまって安樂に随って広隆寺を出た。

野づらをわたる黄昏の風は、肌に冷めたかった。この秋もあと幾旬もなく去ってゆくことであらう。

「この寺も荒れたのう」

と遠ざかってゆく広隆寺をふりかえって安樂はつぶや

いた。

「いかにも。僧房で臥せていても、野ネズミが寝床のなかにまではいりこんでまいます」

「鼻をかじられんようにせよ」

「いや、その心配はございません。幸いわたしは盲しいです。野ネズミもちゃんとそのことを心得ているようです」

「ネズミに人間の盲目がわかるのかな」

「そのようで。また、盲目の人間が危害を加えぬことも承知しておるようです。わたしの枕の周囲にじっとしゃがみこんだまま、眠りをさまたげませぬ」

「絵にしてみたいようだな」

安樂は笑った。

黙々と歩いた生仏は、ふと足を止めた。

「これは御室へ向う道でございますね」

「そうだ。御室の仁和寺」

「寺に女人が集っているのでしょうか」

「むろん女人禁制だが、仁和寺のすぐ近くに住まいおる」
はて、と生仏は視界以外でとらえた記憶をたしかめてみる。仁和寺の周辺にそんな邸があったであらうか。

(つづく)

二 編集後記 二

○小松左京は、宇宙船「地球V」号に乗っている自分を、「無数の科学者や専門家たちによって運航されているこの「探索船」の展望ラウンジに、小さな乗船券をにぎりしめて腰をおろし、行く手につぎつぎにあらわれてくる、不思議なものの形に、あれこれ眼をうばわれ胸をおどらせている乗客にすぎない」(『ゴルディアスの結び目』「あとがき」より)と喝破したが、確かに刻々と精度をきわめて行く最新科学の情報は、私たちをしてこの悠久無限の宇宙の時空間へといやが上にも突き離す。宇宙物理学の高度難

解な新理論に触発されるまでもなく、私たちが包む現実社会の高速にして急激な文明の変容過程に直面している今日現在、だれしもが予測をできぬ未来社会への不安や臆測を抱くのは当然である。吹きまくるSFブームの嵐の中で、もちろん私のようなものが、人類の将来や地球の未来図を考え描

いてもなんら得るところもないが、月明りに、満天の星に散りばめられた大夜空の下では、やはりなにか卒然として大宇宙のかなたへ強く駆り立てられるものを感じてしまふ。……果たして、限りあるいのちを生きるこの小さな私もまた、大宇宙の無限永遠の中の、ひとつのかけがえのない構成要素であったことを。

星月夜佇めば頬に何か降る

三汀

今宵また星のながるる寺の杉

舟月

○人間の精神世界に関しても、精神医学、神経科学、心理学などの諸分野の飛躍的な活動が、加速度的に進展する現代文明の荒波に翻弄される人間の心象世界を解析し、決定して行く。精神分析医(アナライザー)の一般化にかたて加へて、果てはサイコデイクタイプ(心理探索者)などの登場と相いなる。まさに、人間の心意識の世界を、科学の威力によって開発しようとする……。そんな時代を迎えようとする今この時、たとえば「お彼岸とは？」――

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 九月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年 八月二十五日 印刷

昭和五十三年 九月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新装復刊＝

『善導和尚集』

A 5 判 474頁 定価7000円 (送料実費)

◎昭和55年に、善導大師の千三百年ご遠忌を迎えるに際して、時宜を得て、装いも一新して復刊された大書。「五部九巻」といわれた善導著作の全集成とともに、解題、索引等を附した旧版の復刻作業である。豪華函入れの本書を広く推薦したい。

発行 浄土宗宗務庁

発売 山喜房仏書林 〒 113

東京都文京区本郷 5-28-44

振替 (東京) 0-1900

＝好評発売中＝

大正大学教授 竹中信常著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価8,500円 (送料実費)

『宗 教 学 序 説』

A 5 判 474頁 定価6,500円 (送料実費)

◎宗教学界の権威である著者が、最新刊の『宗教学序説』を新たに上梓して、その永年の研究成果を発表されたもの。専門的な詳細な研究書ではあるが、宗教に関心を寄せる多くの人に広く推薦したい。

発行 山喜房仏書林 〒 113

東京都文京区本郷 5-28-44

振替 (東京) 0-1900